

篠伊達玲

illustration  
Saya

王子様は  
発情中?!



王子様は発情中?!

《立読み版》

篠伊達 玲

イラスト Saya

小さな男の子が、花盛りのクレマチスの下で、ぴよんぴよんと跳ねていた。

艶やかな黒い髪は、男の子がジャンプするたびに宙に浮き、着地と共にうなじを柔らかく覆い隠している。

昼下がりのクレマチスは、夏の風に揺れていた。

しばらくの間、鮮やかな花をつけたアーチの下で元気よく跳ねる男の子を、パウルはぼんやりと眺めていた。

どこかで、見た覚えがある。

だけど、誰なのかは、わからない。

ようやく跳ねるのをやめた男の子に、パウルは思い切って声をかけた。

「そこで、なにをしているの？」

声変わりの時期を迎えた時、それほど低い声にならなかったのがすごく残念だったのに、何故か声変わり前と同じ高い声になっている。

おかしいなあと首を右に傾げた。パウルは、こちらをじっと見ている男の子に気付いた。

小さな男の子の目の高さが、まっすぐに立っている自分とたいして変わらない。

不思議に思つて周囲を見ると、中庭の一角にしつらえられた小さな川が、大きいとまではいかないものの、幅が広がっている。

戸惑つて、足元を見て、自分の足の小ささにパウルは驚いた。

足だけじゃない。何もかもが、縮んでいる……いや、幼い頃に戻っている。

「おれは、おまえに、あれを……」

不意に口を開いた男の子は、頭の上を指差したものの、パウルが首を右から左へと傾けたのを見て言葉を切る。

指差されても、パウルの目には、見慣れたクレマチスのアーチしか映らない。

男の子は理解していない。パウルに、つかつかと歩み寄ると、腕を掴んで引張る。

小さいと思つていた男の子は、間近になるとパウルより僅かに背が低<sup>わず</sup>いだけだ。

引張られるまま、素直にクレマチスのアーチへ向かう途中で、パウルは昼前に引き合わされた男の子だと気が付いた。

「おまえに、いちばんきれいなあの花を、とつてやろうと思つたんだ」

彼が指示した頭の上には、クレマチスが綺麗<sup>きれい</sup>に咲き誇っている。

「あれを、僕に……?」

引き合わされた時に膨れっ面をしていた男の子は、にこりとも笑わずに頷いた。  
どうしてだろうと思いつながら、パウルは男の子と頭上の花を見比べる。

先刻交わした挨拶あいさつと同じく、少し怒っているような言い方だった。

叔父だという男性に連れてこられた男の子は、午前中に会った折には、パウルからは男性が邪魔になつてよく見えなかった。

すぐに思い出せなかったのはそのせいかと、パウルは心の中で納得する。

「おれがもっと大きくなったら、おまえに、いちばんきれいな花をとってやる」

「きみは大きくなるまで、ずっとここに居るの?」

そうだったらいいのに、と幼いパウルは願っていた。

遊び相手だったイザークが来てくれなくなったのは、ちょうど、この頃だったからだ。

イザークは、幼少期のパウルの数少ない友達で、今は近衛隊に所属している。

だが、この男の子と会ったのは、これが最初で最後。

新しい遊び相手として連れてこられたのかと期待した当時を懐かしみつつ、パウルは、ふたりの子供

を見下ろしていた。

小さな男の子と、確か背は少し彼よりも高かったけれど年齢は下だった幼少期のパウルと、こうして上から見下ろしている今の自分。

自分が自分を眺めている……その奇妙さに気が付いて、ようやくパウルは自分が夢の中にいることに気が付く。

「ううん。もう、かえる。でも、大きくなったら、きっとあいにくるから」

そう言うと、男の子は突如その場にしゃがみこむ。

クレマチスのアーチの足元に繁っているクローバーを、小さな手が何度も掻き混ぜる。しばらくすると「あった！」と嬉しそうな声をあげて、男の子が立ち上がる。

「おい。ひだりて、だしてしろ」

言われるがままに差し出した左手に、男の子は自分の左手を重ねる。

眉をしかめて苦心しながら、お互いの薬指をひとまとめにしてクローバーを結びつけた。

これでいいと呟いた男の子が、近づけていた顔を離す。

ふたりの指に、四葉のクローバーをやや緩めに結びつけた男の子が、シロツメクサを摘み取ってパウ

ルに差し出す。

「……やくそく?」

ふたりの左手の薬指を重ねて、ひとりが四葉のクローバーを結び付け、もうひとりが巻き付くクローバーの茎にシロツメクサの花を差す。

それは、ルクサルド国の人間なら誰でも知っている誓いの儀式だ。

「おれと、おまえ。ふたりのやくそくだ。大きくなったら、あいにくる。だから、おまえはおれがあいにいくまで、まっている。いいな?」

「うん、わかった。ぼく、ずっとまってる」

受け取ったシロツメクサの花を、パウルは四葉のクローバーの間に差した。

会いに来る……ただそれだけの約束を、ふたりの子供が真剣な顔で交わしている。

ふたりを上から眺めていたパウルは、そういえばこの男の子は今頃どうしているんだろうかと思いつつ、目覚めの気配に溶けていった。

※続きは製品版でお楽しみ下さい。



王子様は発情中?!

《立読み版》

発行日 2011年10月28日

著者名 篠伊達 玲

イラスト Saya

発行所 【MILK-CROWN】

株式会社水晶院

<http://www.milk-crown.net/>

(C) Rei Shinodate 2011

※本著作物の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。